サイン

年　組（　番）名前　　記入日　月　日

ヤングケアラー 深刻な状況

「睡眠、勉強の時間不足」「悩み 話せない」

大人の代わりに家族の介護や家事を担う「ヤングケアラー」が、深刻な状況に直面している。国の初の調査で、中高生の20人に1人いることがわかり、勉強や睡眠時間が不足し学校生活に支障が出たり、誰にも相談できずに孤立したりする実態が浮かび上がった。国は5月に対策をまとめる方針だ。

◆いつも疲れていた

「勉強どころじゃなかった。毎日、精いっぱいだった」。大阪府の女性（40）は、病気の母親と2人暮らしだった中学時代を振り返る。

母親は横になることが多く、買い物や料理は女性がこなした。昼食はいつもパン。見かねた友達が、手のこんだおかずが入った弁当をくれたこともあった。うれしさとともに「なんでうちは……」とさみしさもこみ上げた。母親を一人にするのが心配で、部活動も修学旅行も諦めた。

家計のために卒業後は就職し、定時制高校に通った。体はいつも疲れていたが、そんな日々が当たり前だと思い、自分からは助けを求めなかったという。

女性は今、講演会などで体験を語っている。「困っていることに気づき、サポートしてくれる大人が必要」と訴える。

調査に寄せられた中高生の自由意見

- 誰かに相談する余裕なんてない。それよりも、今日1日どう過ごすかでいっぱい
- 友達に暗い話をすると空気が悪くなるので、悩みや苦しみを伝えたくても話せない
- 今の状態はしんどい。全部を代わってほしいとか、ここから逃げ出したいわけではなく、私にも少し余裕が欲しい

◆小学生から世話

調査は厚生労働省と文部科学省が昨年12月～今年2月、公立校に通う中2と高2にインターネットで実施し、計1万3777人から回答を得た。

「世話をしている家族がいる」と答えたのは、中2が5・7％。平日のケアの時間は1日平均で約4時間、7時間以上も1割に上った。「勉強する時間が取れない」「睡眠が不十分」「進路の変更を考えざるを得ない」などの訴えも目立った。

家族の世話を始めた時期は平均で11歳、中2の半数は小学生の頃からケアを担っていた。対象はきょうだいが最多で、父母や祖父母が続いた。6割が「相談しても状況は変わらない」などとして、学校などに相談した経験がなかった。

大阪歯科大の浜島淑恵教授（社会福祉学）は［　　］と話している。

（2021年4月18日 読売新聞朝刊より）

1 ヤングケアラーとはどのような若者を指しますか。後ろに「～若者」が続くように記事中から18字で抜き出しましょう。

若　者

2 大阪府の女性は、なぜ取材に経験を語ったのでしょうか。適切なものを全て選びましょう。

① 自分の過去の体験が新聞に載れば、大人が困っている子に気付き、支援につながると考えたから。
② 中学生時代の自分を助けてくれなかった周囲の人を今からでも非難したかったから。
③ つらい毎日が当たり前だと思ってしまい、声を上げられない子どもの気持ちを代弁したいから。
④ お金がないために、修学旅行に行けなかったことを今も後悔しているから。

3 文章全体から判断すると、［　　］に入る言葉として最も適切なものは次のうちどれですか。番号で答えましょう。

① 「ケアを担う子どもが孤立しないよう、周囲の大人が問題に気づき支える仕組み作りが大切だ」
② 「ケアを担う子どもが、家計のために進路を変えなくて済むよう、まず経済的な援助をすることが大切だ」
③ 「ケアを担う子どもが体調を崩さないよう、まず十分眠ってもらえる体制をつくることが大切だ」

©読売新聞社 2021年　無断複製・転載を禁じます